目次

序章　ビルマ戦　知られざる最後の一年……1
クーデター　厳戒下のミャンマー／ラングーン攻略からインパール作戦まで／太平洋戦争で最も無謀と言われたインパール作戦／インパール後のさらなる地獄　道徳的勇気の欠如

第1章　「インパール」後のさらなる地獄……19
ビルマの最後の一年に迫る「高木資料」／インパール作戦後の一年間／戦没者名簿から浮き彫りになるインパール後の「地獄」

第2章　大東亜共栄圏　同床異夢の大義……33
軍事クーデター後のミャンマーに入る／現地取材への模索／ビルマ国軍元少尉バティンさんとの出会い／ビルマの悲願　イギリス植民地支配から脱したい／独立運動のリーダー、アウンサン／アウンサンと南機関／日本軍統治下でのビルマ国防軍（BDA）の創設／ミャ

ンマーの人々に刻まれた日本軍の記憶／強いられた「協力」

第3章　繰り返される無謀な戦い　イラワジ会戦……65

インパール後の作戦指導の中心人物　田中新一参謀長／イラワジ河で英軍を迎え撃つ強気の作戦／事態の変化に対応できない方面軍首脳／今も生々しく残る戦いの傷痕　メイティーラ／戦場となった村／英軍機による空爆／マンダレーヒルの激戦／戦場の実態を記録した齋藤博圀少尉の日誌／圧倒的戦力差と疲弊する兵士たち／忖度による敵戦力の過小評価　要衝メイクテーラ失陥／前線にみられる統制の欠如／従軍看護婦たちの証言／経理将校から斬込隊へ　齋藤少尉が見た惨状

第4章　軍上層部の〝道徳的勇気の欠如〟……115

イギリスに眠る膨大な資料／イギリス人語学将校が見た日本軍／日本軍上層部の尋問調書／イギリス軍司令官が指摘した日本軍の欠陥

第5章　日本かイギリスか　アウンサンの葛藤……129

アウンサンの失望　大東亜共栄圏の現実／日本軍に対する「革命」の始まり／水面下でのアウンサンの抗日活動／イギリス機密文書に

記されたイギリスの思惑／櫻井徳太郎少将の日誌 ビルマ方面軍の皮算用／ビルマ国軍の蜂起／櫻井少将の苦悩／抗日一斉蜂起 ビルマ国軍元少尉の証言／若き日本軍将校の思い

第6章 危機迫るラングーン 司令部撤退の衝撃……159

イギリス軍、ラングーンに南下／ラングーンに残る戦争の痕跡／蘭貢高射砲隊・若井徳次少尉が残した史料／若井徳次少尉が見たラングーン「芸者と上級将校」／芸者の告白 萃香園の実態／ラングーン放棄の衝撃／撤退決断の司令官は〝東條の子飼い〟／大東亜共栄圏を支えた商社マンたち／商社日綿とビルマ／兵隊となった商社マンたちの悲劇／犠牲になった社員たち／支店長の悔恨／英軍のラングーン奪還／翻弄される若井少尉の部隊

第7章 忘れられた戦場 最後の一カ月 シッタン作戦……213

大東亜共栄圏の断末魔／日本人とビルマ人〝殺し合い〟の記憶／取り残された軍隊による絶望の作戦 シッタン作戦／敢威兵団 地獄の行軍／海軍少佐の記録 シッタン作戦の実相／作戦開始 マンダレー街道を突破せよ！／筒抜けだった作戦 イギリス軍語学将校ルイ・アレンの資料／魔のシッタン河 呑み込まれる日本兵／救護看護婦

の悲劇／日本の終戦を知らず敗走を続けた堤少佐の部隊

第8章　戦争の惨禍　伝え残した記録 …… 253

ビルマ戦 日本軍指導者たちの戦後／悲願を前に アウンサンの悲劇／語学将校ルイ・アレンが抱え続けた苦悩／惨禍を伝え残す 元将校たちの執念

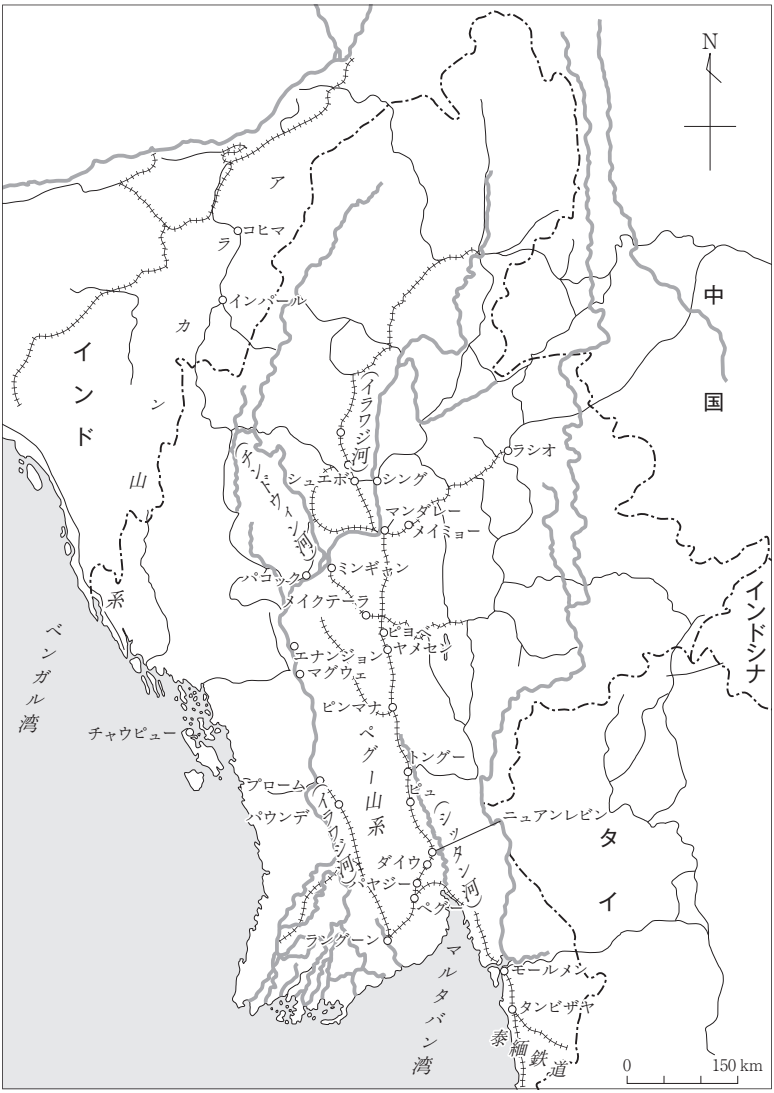
終　章　日本の戦争　過ぎ去らない過去 …… 267

ミャンマーの過去と現在 ビルマ国軍元少尉の思い／ある残留日本兵の遺言「トンボになって日本に帰りたい」／番組放送を終えて

参照文献一覧 …… 279

あとがき …… 283

＊本書に登場する方々の年齢は、取材時のものである。



関連地図(『戦史叢書 シッタン・明号作戦』付図をもとに作成)

序章　ビルマ戦　知られざる最後の一年

クーデター　厳戒下のミャンマー

二〇二二年六月初旬、私たち取材班は、ミャンマー（旧ビルマ）で最大の旅客数を誇るヤンゴン国際空港に降り立った。太平洋戦争期間中、一六万七〇〇〇もの日本軍将兵、そして大東亜共栄圏の一翼を担った多くの民間人が命を落とした「ビルマ戦」についてのＮＨＫスペシャルを制作するための撮影取材だった。最大都市ヤンゴン（旧ラングーン）から首都ネピドー、そして激戦地となった中部の都市マンダレーをめぐる三週間の取材行程だった。

五月後半から乾季から雨季に移行していくミャンマーではそれに伴って気温も低下していくが、それでも温度計は三〇度を超えていた。東南アジア特有の多湿もあいまって、空港に降り立ったとたんに、滂沱の汗が流れ出る。

ヤンゴン国際空港は、〝最大の旅客数〟とは言うものの、それは少し前までの姿であり、その時は国際空港の姿は見る影もなかった。ミャンマーでは、二〇二〇年三月から新型コロナウイルスの世界的な感染拡大を受けて国際線の着陸禁止措置がとられていて、二〇二二年四月一七日に国際線の運航

が再開されたばかりだったからだ。

しかし、ミャンマーへの海外からの入国が減少していた原因は、新型コロナだけではなかった。現在はロシアによるウクライナへの軍事侵攻によって国際ニュースの後景へと退いているが、ミャンマー国軍によるクーデターとその後の混乱が大きな要因だった。

新型コロナの発生から一年が経過していた二〇二一年二月、その前年に行われた総選挙についてミンアウンフライン司令官が率いるミャンマー国軍は、アウンサンスーチー氏が率いる国民民主連盟（ＮＬＤ）の大勝に「不正があった」として、全土に非常事態宣言を発出し全権を掌握した。軍事力を背景にしたクーデターだった。二〇一一年に軍政から民政に移行して以来、国家顧問として民主化にむけた動きの中心にいたスーチー氏やＮＬＤ関係者は身柄を拘束され、国際社会は騒然となった。

長年、多くの血を流しながら民主化を希求し続けてきた市民たちの動きは迅速だった。情報が遮断される中、クーデターの一週間後には複数の都市で大規模なデモが行われた。武力で圧倒的に勝るミャンマー国軍に対し、市民たちはＳＮＳを使った情報発信などで応戦、それは「デジタルレジスタンス」とも呼ばれる新たな世代のデモだった。しかし、国軍は丸腰の市民に殺傷力の高い武器を使用するなどしてデモを鎮圧。徹底的な情報統制と参加者への仮借（かしゃく）のない弾圧によって抵抗する市民たちの動きを封じ込めていったのである。

私たちが、ミャンマーに入ったのはクーデターから一年四カ月後のことだった。スーチー氏の側近

二人の死刑が承認されるというニュースが伝えられていた。クーデター発生直後は二〇〇〇人規模のデモが行われていた最大都市ヤンゴンは平静を取り戻しているかのように見えた。しかし、主要機関の前には鉄柵がものものしく設置され、市街地の治安警備にあたる国軍の兵士にカメラを向けることも固く禁じられた。この時、ミャンマー全土でデモへの弾圧や拘束後の暴行などで死亡した人は確認できただけでも二〇〇〇人を超えていた。異常事態は水面下で続いていた。

この五年前の二〇一七年の同じ季節に私たち取材班は、ミャンマーを訪れていた。世界でも屈指の豪雨地帯と言われるインドとミャンマーの国境地帯で敢行されたインパール作戦を取材するためだった。乾季と雨季に峻別されるミャンマーでは、五月から六月初旬にかけては、淡水と海水が混じり合う汽水域のような天候が続く。六月後半からの豪雨を予感させるような曇天と肌に空気がまとわりつくような高温多湿。旅に相応しい季節とは言いがたい。イギリス統治の影響を色濃く受ける壮麗な建造物群と、東南アジア特有のエネルギーを感じさせる雑多な町並みのコントラストは、五年前とさほど変わらない印象だ。しかし、そこに暮らす人々の活気、表情は比べるべくもないように感じた。喧噪の中にほの見えるなんともいえない昏（くら）さは、本格的な雨季を前にした曇天と高温多湿のせいばかりでないのは当然だった。

ラングーン攻略からインパール作戦まで

今回、私たちがミャンマーを再訪した理由は五年前に遡る。

当時、私たちは長年にわたる交渉の末、日本軍が一九四四年に決行したインパール作戦の全行程の撮影を許された。ミャンマー側とインド側にそれぞれ取材班を派遣し、太平洋戦争で最も無謀と言われた作戦の全貌を詳らかにしようと試みたのである。ミャンマーは長く軍政下にあり、国境地帯では少数民族による紛争も続いていたため、全行程のテレビ映像での記録は初めてのことだったと思われる。

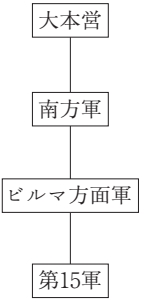
かつて日本陸軍の第一五軍やビルマ方面軍の司令部が置かれていたミャンマーの最大都市ヤンゴンは取材の起点だった。ヤンゴンは、ビルマ王国が一八五二年の第二次英緬戦争でイギリスに敗れてからは、英領ビルマ州の州都になった。それにともない名称も英語読みのラングーンとされた。一八八五年の第三次英緬戦争の翌年、ビルマ王国は滅亡、イギリスはビルマ全土を英国領にすることを宣言し、英領インド帝国の一州とした。州都ラングーンはイギリスによってますます近代都市に作り替えられていった。一方でそこには、ビルマ・ナショナリズムの台頭という副産物もあった。一九四二年からの日本の占領をへてもとのヤンゴンに名を戻してからも、ミャンマーの政治経済の中心地であり続け、二〇〇六年に首都がネピドーに移転されてからも、人口は五〇〇万人を優に超え、最大都市の地位は揺らいでいない。

ヤンゴンにはいまも日本軍の遺構が数多く残されている。ビルマ方面軍司令部があった建物はヤンゴン大学に見ることができる。ヤンゴンの郊外には戦後建造されたビルマ戦の日本人戦没者の広大な墓地もある。日本政府が一九八一年に設置した記念碑には「さきの大戦においてビルマ方面で戦没した人々をしのび平和への思いをこめるとともに日本ビルマ両国民の友好の象徴としてこの碑を建立する」と刻まれている。

日本軍は当初はビルマへの侵攻を具体的には考えていなかったとされる。太平洋戦争開戦時の大本営の作戦計画では「南方政策概ネ一段落シ　状況ノ許ス限リ　ビルマ処理ノ作戦ヲ実施ス」(陸軍南方作戦計画)とされていた。ここでいう南方政策とは英米の重要軍事拠点である香港、マニラ、シンガポールであり、豊富な資源があったオランダ領インドつまり現在のインドネシアであった。ビルマをどう固めるかについては開戦時になっても、明確にその方策は定まっていなかったという。

しかし、一九四一年一二月八日の開戦以降、南方作戦緒戦の快進撃によって、いわば〝なし崩し〟的に侵攻が実行に移されていった。しかし、緒戦勝利後も、大本営と南方軍の考えは微妙に食い違っていた。寺内寿一大将を総司令官におく南方軍はタイ国侵入作戦終了後、タイ国境に近いビルマ・モールメン(現モーラミャイン)の空港の占拠を企図するにとどまっていた。タイ国およびビルマ方面の作戦を担う第一五軍はわずか二個師団で、広大なビルマの内域に侵攻する能力は与えられていなかったからである。これに対し、大本営は早期のビルマ攻略の計画案を立案していた。参謀本部作戦課長の服部卓四郎大佐を南方軍に派遣し、ビルマ作戦開始を促したのである。大本営、南方軍、そして現地

軍の現状認識の落差は、その後のビルマ戦にも終始つきまとっていくのである。



第組織図
大本営から第15軍まで

いくつかの齟齬がありながら、飯田祥二郎を司令官とする第一五軍はビルマ攻略を実行に移していく。第一五軍隷下の第三三師団がラングーンを占領したのは一九四二年三月八日。四月二九日には第五六師団がラシオ(現ラーショー)を占領。さらに五月一日には第一八師団がマンダレーを攻略した。ラングーンへの無血入城のさい、飯田司令官らが英領ビルマ総督公邸の前で勝ち鬨をあげる当時のニュース映像は、あまりにも有名である。その後、ビルマは日本軍の軍政下におかれることになった。

マンダレー失陥のあと、イギリスをはじめとする連合軍の指揮機能は逐次崩壊。日本軍の苛烈な掃討によって、インドや中国に敗走した。中国からの遠征軍を率いていたアメリカのジョセフ・スティルウェル中将や、第一ビルマ軍を指揮していたイギリスのウィリアム・スリム中将はインド・インパールに逃れた。インドに帰り着いたスティルウェル中将は「われわれは敗北の憂き目にあい、最悪の屈辱を受けた。われわれはなぜこんな憂き目にあったかを反省し、すみやかに反攻を始めなければならぬ」と語ったとされる。連合軍が味わった「最悪の屈辱」は、この二年後のインパール作戦、さらにその一年後のラングーン奪還へとつながっていく。

当初、日本軍による軍政はうまく進められているように見えた。その根底にはイギリスの植民地下

におかれていたビルマの人々の反英感情があったからに他ならない。実は、日本軍は、開戦後のビルマ侵攻に先立って、「援蒋ルート」のひとつ、ビルマルートの遮断を目的の一つとして鈴木敬司大佐をビルマに派遣し特務工作を行っていた。

当時、重慶に政府を移していた蒋介石の国民党を支援する「援蒋ルート」は複数あり、ラングーン、ラシオを経て昆明と重慶を結ぶビルマルートの存在に日本軍は特に悩まされていた。一九四〇年六月の時点で中国への補給量に占めるビルマルートの割合は全体の三分の一にまでなっていたからだ。ビルマルートを遮断することは、泥沼化しつつあった日中戦争を完遂するために日本軍にとって不可欠だったのである。

鈴木は、ビルマの人々のイギリスからの独立機運に着目する。当時、ビルマでは民族政党が大同団結した「自由ブロック」を結成し、反英闘争が活発になっていた。鈴木は、独立運動の支援を通してビルマルートの遮断という目的の達成を試みたのである。「南益世」の名で活動した鈴木大佐の特務機関は「南機関」と呼ばれ、独立のためにビルマの若者たちに軍事訓練なども行った。若者の一人が、アウンサンスーチー氏の父親アウンサンである。

アウンサンの日本との関わりは深い。開戦の一年前には中国アモイに潜伏していたアウンサンを日本に連行。鈴木はアウンサンにビルマの独立支援構想を持ちかけた。そして箱根で静養させながら、東京、横浜、名古屋、大阪、京都、奈良など日本各地を案内した。のちに「独立の父」と呼ばれることになるアウンサンは、日本の中国での振る舞いを知悉していたため当初は鈴木の申し出に逡巡していた。しかし、軍事訓練をへてビルマ独立義勇軍を創設。日本軍とともにラングーン攻略のために戦

い、大きな貢献を果たした。そして、市民たちの多くもアウンサンらの決起に賛同していたのである。

ビルマ独立義勇軍は後にビルマ国防軍をへてビルマ国軍となり、現在のミャンマー国軍となった。そのミャンマー国軍が創設者の娘アウンサンスーチー氏に対してクーデターを断行したことは、ミャンマー史の皮肉であり悲劇である。と同時に、日本軍がその端緒に大きな役割を果たしていることは記憶に強くとどめておくべきことだろう。

当初日本は戦勝後のビルマの独立を約束し、戦争協力を得る必要性から早期のビルマの独立の方針を具体化していった。一九四三年八月一月、軍政が廃止されビルマは独立を宣言した。バモオが国家元首となり、アウンサンは国防大臣に就いた。ビルマ独立の方針を決定したのが「緬甸（ビルマ）独立指導要綱」である。この内容や同時に結ばれた「日本国緬甸国軍事秘密協定」をめぐる禍根が、アウンサンの反乱の要因の一つになっていくが詳細は後述に譲る。

一方で、連合国軍側のビルマをめぐる動きも慌ただしくなっていた。アメリカのルーズベルト大統領とイギリスのチャーチル首相は一九四三年一月のカサブランカ会談で、この年の終わりにビルマ奪回作戦を開始することで合意する。イギリス軍は戦力を徐々に回復させ、特に航空戦力においては優勢さを確保するようになっていた。それを象徴したのが一九四三年二月のイギリス軍の動きだった。北部ビルマに突如、イギリス・インド軍の挺身部隊が侵入、その地域を守備していた日本陸軍第一八師団の防衛管区内に深く潜入したのである。イギリスのチャールズ・ウィンゲート准将が率いていた第七七インド旅団、通称「ウィンゲート旅団」だった。

ウィンゲート准将は、パレスチナや東アフリカでのゲリラ作戦で大きな成果をあげ、近代的ゲリラ戦を構築したと言われる。挺身部隊は火器だけを持ち、補給はすべて空中から受け取ることで、険しい山岳地帯の中でも高い機動力を維持してすばやく日本軍の戦線に侵入し、ゲリラ的に戦うというのがウィンゲートの戦法だった。ウィンゲート旅団の日本軍への攻撃は敗北に終わるが、急峻な山岳地帯を盾にしていたはずの第一八師団は、敵に急襲されたことに大きく動揺した。一方でイギリスは敗退したものの、制空権が十分に保持されていれば来たるビルマ奪還のさい優位にたてると自信を深める。この時、第一八師団の司令官が、後にインパール作戦を指揮する牟田口廉也中将だった。

太平洋戦争で最も無謀と言われたインパール作戦

インパール作戦は作戦名を「ウ号作戦」という。始まりは、ビルマ侵攻の余勢をかってインド東部に進撃しようという南方軍の構想だった。ビルマを占領下においたわずか三カ月後の一九四二年八月、南方軍は「インド東北部に対する防衛地域拡張に関する意見」(「南方軍関係戦闘綴」)を正式に大本営に提出する。この作戦は「二十一号作戦」と呼称された。しかし、第一五軍司令官の飯田中将は無謀で実行困難とし、この時は、隷下第一八師団の師団長だった牟田口廉也中将も同様の意見だった。このころ太平洋戦線のガダルカナルの戦局が苛烈さを増していたこともありいったんは頓挫する。しかし、大本営はこの「二十一号作戦」を中止ではなく、一九四三年二月以降に延期とした。

ミャンマーとインドの国境、最も厳しい雨季には川幅が六〇〇メートルにも迫るチンドウィン河と

二〇〇〇メートル級の山々と密林地帯が広がるアラカン山系を越え、インド・インパールに置かれていたイギリス・インド軍の拠点の攻略を目指すという構想が再び持ち上がったのは、一度は「実行困難」とした牟田口中将が第一五軍の司令官に昇格してからだった。ウィンゲート旅団が密林地帯を越え急襲してきたことでビルマをめぐる状況に強い危機感を抱くようになったのに加え、太平洋方面の情勢が急速に悪化する中で、戦局を打開することで功を上げようと、この作戦実行を強硬に主張するようになっていたのである。牟田口中将の構想は、さらに、インドのアッサム地方への侵攻にまで及んでいた。

当初から幕僚の一部はこの作戦の危険性や無謀さを認識していたが、冷静な分析に基づく反対論や懸念は、ことごとく退けられていった。兵站の補給路の確保が困難だと作戦に異を唱えた第一五軍の小畑信良（おばたのぶよし）参謀長に至っては、牟田口中将の逆鱗に触れ、就任からわずか二カ月で参謀長を罷免された。

そして作戦は一九四四年三月に実行に移される。本格的な雨季の到来を前にインパールを攻略することを目指し、携行が許された食料はわずか三週間分に過ぎなかった。インドとミャンマーの国境地帯は世界でも屈指の豪雨地帯である。雨季に入る前、「インパールは天長節（天皇の誕生日を祝う日。昭和は四月二九日）までには占領してご覧に入れます」というのが牟田口中将の口癖だったが、雨季に入っても日本兵の誰一人としてインパールの地を踏むことはできなかった。

現場の戦いは、困難を極めた。一方で、南方軍やビルマ方面軍の戦況分析は極めて緊張感を欠いた